

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：42680

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530816

研究課題名（和文） 明治期国語教育とヘルバルト派教育学

研究課題名（英文）

The national language education in the Meiji period and "Herbart's pedagogy"

研究代表者

山本 康治 (YAMAMOTO KOUJI)

東海大学短期大学部・教授

研究者番号：10341934

研究成果の概要（和文）：「ヘルバルト派教育学」の導入が積極的に進められた北海道教育界においては、同教育学が、北海道師範学校を中核として急速に道内の教育現場に浸透し、それが明治40年代まで続いたことが明らかとなった。幼児言語教育においては、同教育学の目指す「美感の形成による人格の陶冶」への理解はあるものの、教育現場での実践までには至らなかった。また、「国語科」成立自体に同教育学からの直截な影響があることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：It was revealed that in the Hokkaido education which the "Herbart's pedagogy" had positively been introduced into, the Herbart's pedagogy rapidly permeated the Hokkaido educational community particularly the Hokkaido normal school, and the situation lasted until the 40's of the Meiji period. Although there were some approval in the preschool linguistic education for "the cultivation of personality by forming aesthetic judgment" which was the aim of the pedagogy, the educational practice was not implemented in the classroom. In addition, it was clearly indicated that Herbart's pedagogy directly affected the formation of "language arts".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育史・小学校国語教育・明治期・ヘルバルト・文学・幼児教育・童話・談話

1. 研究開始当初の背景

明治33年の改正学校令により「国語科」

が成立し、新たに「国語読本」が多くの教科書出版社から出されることとなった。それらの編纂趣意書はいずれも「趣味あること」を特徴として挙げている。これは、それまでの実学重視または忠君愛国の思想教育に軸足を置いていた学校教育が、児童・生徒の美感の形成という、子供の内面にまで踏み込んだという点で極めて特徴的なことと言えるが、このような傾向を支えたのが、「ヘルバルト派教育学」であることは、これまであまり着目されていなかった。この時期の教科書（検定教科書）に対して、多くの教師向け指南書が出版されているが、そこでは「趣味あること」として、童話や韻文といった文学教材の重要性が指摘されている。例えば、立柄教俊・ライン著『ヘルバルトチルレル派教授学』（明治33年）では、「心情的修養ノ教材」として文学教材重視の姿勢が示されており、また佐々木吉三郎『国語教授法集成』（明治39）では、「韻文教授の方法」について「ヘルバルト派教育学」の観点から論じている。これらの点においては、拙稿「明治四十年代「国語」科における韻文教育の位相——ヘルバルト派教育学との関わりから——」（『東海大学短期大学部紀要』41号、2008年3月）にてその概要を指摘している。更には、同時期、就学前における幼児教育の分野においても、絵本・昔話の教育的効用が喧伝されていくのも、同様の圏域における現象だと考えられる。

このような傾向は、明治37年の国定教科書制定により、一旦は排除されていく。つまり「国語科」の教科書が一本化し、その編纂意図が言語技術教育の方向に纏められたためであるが、これまでの調査では、「ヘルバルト派教育学」を推進していた東京高等師範学校教授陣を中心に、文学教材による児童・生徒の情緒面の教育を重視する傾向は、教育実践の現場において根強く支持されていたようである。明治43年には義務教育延長を受けて第二期『国定教科書』が出されるが、そこでは文学教材が多く採択されている。例えば、島田民治『新国定教科書国語科教授要義』（明治43年）では、その特徴として「童話及び国民伝説」、「文学的趣味」を持った修身教材、韻文などの「文学的材料」の採択が挙げられている。類似の指摘は同時期の教育書に散見できるが、これらにも師範学校主導により各地に定着していた、「ヘルバルト派教育学」からの影響を推察することが出来る。

これまで「ヘルバルト派教育学」の影響は、現場での教授法、つまり「五段階教授法」といった、教育実践の手法として、特に教育実践の場での展開が研究されてきていた。稲垣忠彦『増補版明治教授理論史研究』（理論社1994年）では、「ヘルバルト派教育学」

の受容のプロセスが多く資料を基に論証されている。しかしながら、特定の教科に関する固有の問題については論及の対象とはされていない。また、特定の教科を対象に「ヘルバルトは教育学」の影響を論じたものに、杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』（風間書房 平成17年）が挙げられるが、本書においてもそのタイトルが示すとおり、その対象は「音楽科」に限定されたものである。「ヘルバルト派教育学」が「国語科」の内容にいかなる影響を与えたかについてはこれまで看過されてきたのが現状である。

2. 研究の目的

(1) 明治期の国語教育の実相については、小学校「国語科」の成立とその展開を軸として既に明らかにされつつあるといえよう。しかしながら、大正以降の「国語科」の中心に文学教材が位置付けられるようになった経緯について、明治期国語教育がどのように関わっていったのかについては未だ明らかになっていない点が多いと思われる。この点について、明治二十年代に日本に紹介された、ドイツの教育学者ヘルバルト及び彼の考えを受けた教育理論、所謂「ヘルバルト派教育学」がこのような「国語科」の方向付けに大きに寄与したと推察されるが、そのプロセスまたは力学については充分な解明がなされていないのが現状である。本研究では、明治二十年代から四十年代にかけて、「国語科」に文学教材がどのように導入されていったのかを、「ヘルバルト派教育学」との関わりから明らかにし、明治期国語教育が国民意識の形成に与えた影響について検証する。

(2) このように、本研究の特色は、明治期国語教育と「ヘルバルト派教育学」の関わりという観点から、国語教育が文学教育として認知されていく過程を明らかにする点にあるが、このことからいくつかの波及的成果が予想される。

① 明治期の国語教育の特徴を明らかにすることで、それが国民意識形成にどのように関わっていったのかという、近代日本のナショナリティに関する新しい切り口の可能性が考えられる。具体的には、既に指摘されているように、明治・大正・昭和と進んでいく中で、国語教育が文学教育に傾斜していき、その過程で、夏目漱石や森鷗外等といった特定の文学者に対する「カノン」（聖典）形成がなされたと考えられるように、それらを含みこんで、義務教育という国民皆教育の場での文学教育への傾斜が、「大人」としての、後の国民の意識形成にどのように関わっていったのかは極めて興味深い問題である。このことに関していえば、明治30年代における、国語の内実を巡る闘争、つまり方言是正や表記の問題という言語技術的な教育内容

と、子供の興味や情緒的な面の伸長を図る文学的教育内容との闘争の様相を捉え、後者の理論的かつ実践的な面での中核にあった「ヘルバルト派教育学」の果たした役割を明らかにすることは必要不可欠であると考えられる。そして、このような闘争的な関係にも関わらず、基本的にはどちらも国家の主導する「忠君愛国」といった一定の価値観の枠組みに収斂する形でぶつかり合いでしかなかった点に、その後には繋がる多くの問題点を見出せるのではないだろうか。つまり「忠君愛国」に寄与する形での文学教育が、「興味・関心」という子供の情緒的な面を用いてナショナリティの形成を図る「優れた」装置として機能したこと、これらが何を生み出したのかを知ることは、継続的に追究すべき問題である。

② 「ヘルバルト派教育学」が与えた影響は、小学校の「国語科」だけでなく、「唱歌科」や「歴史科」といった他教科にも及び、更には、学校教育の前段としての就学前教育・保育にまでその影響は広く及んでいる。例えば、雑誌「児童文化」には、「ヘルバルト派教育学」を踏まえた、絵本、物語の伝え方などを見ることが出来る。その点で、「国語科」という教科枠を超えて、言語教育という大きなフレームからの検討も要請されよう。本研究においては、小学校のみならず、就学前の子どもに対する言語教育に対しても、「ヘルバルト派教育学」との関わりの中で解明する必要がある。また、このような現象が、東京高等師範学校系の教員によって押し進められていたこと、また特に北海道教育界において「ヘルバルト派教育学」の積極的な導入が図られたことについて、これまで殆ど看過されていたきらいがある。従って、「同教育学」の展開の力学についての解明も必要であろう。

③ 「ヘルバルト派教育学」が小学校国語科に与えた影響だけでなく、そのような傾向を受け入れた文化的土壌についての検討も必要であろう。特に、日清戦後における、抒情詩のブームや、また所謂「美文」に対する関心の強さなど、情緒的なものに対する受容者側の側面についても検討が求められる。特に、「美文」については、明治30年代には、教科書への積極的な導入が行われており、「同教育学」と当時の文化的土壌との関係を知る手掛かりとして、有効な指標として検討することが必要である。この点については、既に拙稿「明治期三十年代「美文」の流行と学校教育」（『東海大学短期大学部紀要』42号、2009年3月）において、その可能性についての検討を行った。

④ 教養教育としての文学教育の役割の再検討。広くは大正教養主義、焦点を絞れば、例えば「円本ブーム」などといった文化現象については、これまで義務教育が果たした役

割は捉えられきれてなかったようである。しかしながら、これらの現象の基底に、義務教育、特に文学教育が果たした役割があったのではないかと推察している。文学教育成立のプロセスを明らかにすることを通して、大正期・昭和期の文化現象との関わりを検討する。

3. 研究の方法

本計画は、大きく三つの柱により構成される。

(1) [系列A]「ヘルバルト派教育学」の受容と展開に関する研究。ここでは先行研究の到達点を明らかにしつつ、同教育学の展開の実際を、東京高等師範学校系の教員による実践推進の動向、また同教育の導入が積極的に進められた北海道教育界の事例を含めて実証的に進める。これらは、小学校に限らず、就学前の幼児期言語教育に関する点についても検証を進める。

(2) [系列B] 国語教育の成立と展開に関する研究。ここでは、「国語科」成立の背景および、「国語教科書」の編纂方針および採択教材の傾向、実際の教授例も含めて、「ヘルバルト派教育学」からの影響を明らかにする。

(3) [系列C]「ヘルバルト派教育学」と国民意識の形成に関する研究。同教育学を受け入れた文化的土壌について、「美文」や「抒情詩」などの受容を指標としてその背景も含めて明らかにする。また、同教育学の影響を受けた、学校教育がどのように国民意識の形成に関わっていったのかについて、特にカノン形成とその影響について明らかにする。

4. 研究成果

(1) [系列A] については、「ヘルバルト派教育学」の導入が積極的に進められた北海道教育界を中心に実地調査を行った。その結果、明治30年代前半に北海道師範学校校長榎山栄治が中心になり、同附属小学校を基幹校として、教員研修、授業研究、啓蒙書の編集出版が行われ、それを契機に同教育学が急速に道内の教育現場に浸透していく過程が明らかになった。これは、東京高等師範学校を中心として、全国各地域の師範学校を経て、教育現場へ同教育学が展開したという推測を裏付けるものであるとともに、明治30年代において、そのような教育制度ヒエラルキーが特定の教育学の導入・展開・浸透に大きく寄与したという点で、それまでとは一線を画する現象であったともいえる。また、明治30年代後半には教育現場への影響を持たなくなったとされている同教育学が、北海道教育界においては、明治40年代においても積極的に活用されていることが明らかとなり、特に、同教育が目指す「美感の形成による人格の陶冶」という教育的価値が、「国語科」の文学教材を媒介として、教育現場に浸

透していったことが明らかになってきている。

幼児の言語教育については、「童話」を媒介として、「美感の形成」という点で小学校国語教育との連続性が確認されたが、北海道教育界においては、北海道師範学校での幼稚園教員養成においては同教育学の影響がみられるものの、幼児教育現場ではそれが断絶していることが明らかになった。つまり、理念への賛同はあるものの、実践が見られないということであり、今後は、その理由を明らかにすることが求められる。

(2) [系列B]については、「国語科」成立(明治33年)の中心を担った、当時の文部省学務局長沢柳政太郎の教育観に「ヘルバルト派教育学」が色濃く反映していることが明らかとなり、その結果、「国語科」成立自体に同教育学の直截な影響が見られることを明らかにした。

(3) [系列C]については、文学作品、特に「美文」に対する青年の嗜好を明らかにするとともに、国定教科書所収文学教材の子どもの嗜好調査分析を通して、「情」に対する意識形成の様態を明らかにした。

(4) 今後の方向性としては、これまでの研究で、明治期の言語教育全体に「ヘルバルト派教育学」の強い影響がみられることが明らかになったが、「国語」科成立の原点である「改正小学校令」自体が同教育学の強い影響のもと策定されていった可能性まで明らかになっている。そのため、「国語」科成立に与えた同教育学の影響について、特に、沢柳政太郎の教育思想、当時の教育行政の方向性を踏まえて改めて検証を進めることが必要となっている。

また、明治30年代末には、ナトルプらの「社会的教育学」にとって代わられたとされている「ヘルバルト派教育学」が、文学教材を重視した第二期国定教科書(明治43年)の登場を契機として、教育実践の場において活用されているという北海道教育界における実態を鑑みれば、明治40年代における同教育学の影響をより広範に明らかにすることも必要である。特に、同教育学が目指した、「美感の形成による人格の陶冶」という教育的価値が、第二期国定教科書における文学教材の教育実践にどのような影響を与えたかについて、より深く明らかにすることが必要であろう。更に、同教育学の持つ童話重視という教育的価値が、幼児に対する言語教育としてどのように寄与していったかについて、実証的に明らかにするも含め、明治の言語教育全般に同教育学が与えた影響について検証し、その次の時代(大正)の文化を支えた、日本人のメンタリティ形成に与えた影響を明らかにすることが求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 山本康治、国語科成立の背景—沢柳政太郎とヘルバルト派教育学との関係を踏まえて—、東海大学短期大学部紀要、査読有、45号、2012、39-46
- ② 北川 公美子、明治期の北海道における小学校から見た幼稚園—ヘルバルト派教育学の流行の中で—、乳幼児教育学研究、査読有、第20号、71-79

〔学会発表〕(計2件)

- ① 桑原公美子、明治期におけるアンデルセン童話—明治期の幼児教育との関係を中心に—、国文学言語と文芸の会、2009年7月18日、東京文化会館(東京)
- ① 山本康治、国語教育がなぜ文学教育になったのかの起源について、ひつじ書房20周年記念シンポジウム、2010年9月23日、日仏会館(東京)

〔図書〕(計2件)

- ① 山本康治、他、ひつじ書房、可能性としてのリテラシー教育 21世紀の〈国語〉の授業にむけて、2011、1-23
- ② 山本康治、ひつじ書房、明治詩の成立と展開 学校教育との関わりから、2012、389

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 康治 (YAMAMOTO KOUJI)
東海大学短期大学部・教授
研究者番号：10341934

(2) 研究分担者

桑原(北川) 公美子 (KUWAHARA KUMIKO)
東海大学短期大学部・准教授
研究者番号：00299976